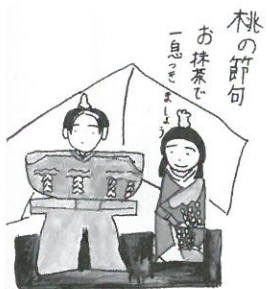




頼りにしています

岡本真理
(神奈川県)



母さんたちが「三人会」あんしんノートを作ったのを見て、2010年に「後見人サポーター募集」のプリントを作ってみました。2012年の4月から、「真理プロジェクト」が始まり、私の生活の様子を聞いてもらったり、母が今やっている事を誰にやってもらうかを考えるのを、一つずつまとめていながら話を進めて来ました。メンバーは、三人会の仲間の人達と、つばさの元ケースワーカーさんだった人と、母と一緒に仕事をしてきた知人も、参加してもらいました。

2013年に、横浜市の「後見的支援制度」と言って、一緒に話を聞いてくれる制度が鶴見区でも始まったので、母と二人で、鶴見の「りんくるつるみ」の事務所を訪問して、私もこの制度の登録もしてきました。

「後見人を付けるかどうかの申し立て手続きの、家庭裁判所に視察に行く」

2013年10月10日の(木)が、ちょうど月1回の「真理プロジェクト」の日でもあったので、その日に家庭裁判所の視察に行くようになったっていました。後見人の申し立ての手続きをするために、裁判所の人と話をして、どうやって私が思っている後見人を付けるかどうかを聞く話もしてきました。申し立ての手続きの書類をもらって来て全部記入してから、それから半年か一年ぐらいになってから、後見人が決まるという制度になっています。裁判所で話をしてくれた人は男性の人で、よりよく細かく説明をしてくれました。小さい部屋で、かなり窓も閉め切っていたので、余計に自然に汗が噴き出すような感じで

した。話しもけっこう難しかったです。ちゃんと話を聞いているとけっこう「ンーなるほど」と、難しさを感じました。

「成年後見制度の申し立ての準備を始める」

私たちがやっている事は、母がまだ元気で動いているうちに、その替わりを手伝ってくれる人を決めるために、毎月一回、家でやっている「真理プロジェクト」で、成年後見制度の申し立ての手続きの仕方について話をし、家庭裁判所に行ってもらって来た申し立ての書類を一枚ずつ見て、下書きをして準備をしました。

これからの予定では、精神科の診断書ももらった、私の財産目録をついたり、住民票を区役所にもらいに行くなど、します。

申し立てするのは私自身が申し立てをしようと言ったことになって準備しています。裁判所に行つて面接を受ける事になります。聞かれたらどんなふうに答えられるか、ちょっと心配になります。深呼吸してから話をしようにします。

*

家庭裁判所の面接は2015年6月17日で、つばさの人たちも行ってもらって、保佐人さんにはお金の管理の手伝いや、福祉サービスの契約の手伝いなどをお願いしたいと言いました。

面接の結果が出るまで、だんだん夏に入つて7月末にやっと結果が出て、私宛に家庭裁判所から審判書が送られて来ました。担当をしてくれるところは「法人後見」のつばさ

で、私の担当の保佐人さんは、真理プロジェクトと一緒にやってきてくれた人が付いてくれました。保佐人さんは大体月一回くらい家に来てくれて、母さんとは引き継いでいくための話をしたり、私はやりたいことを聞いて

母・岡本美知子

ポーター募集」というプリントを作って、友人、知人、親戚などに配りました。その内容は、現在は母がやっている、医療、送迎、原稿や集会を頼まれたときのマネージャーなどのご協力をお願いするというもの。自分の生活がいろいろな人に支えられて成り立っていることを自覚できたという意味では、また一回り大人になったとも言えますが、話し合いを重ねている間に、将来への不安が増してきて、「私はできないの!」と何かにつけて叫んでいた時期もありました。本人に考えてもらうことが負担をかけすぎていたと反省して、日々の生活の楽しみを見直すようにして気持ちを整え、3年かけて本人申立てで後見制度を利用するに至りました。

*

20代の時は「結婚して家を出て行く」と言っていました。43歳の今は、「母さんに長生きしてもらって、できるだけこの生活が続いてほしい」と思っているようです。

法人後見で保佐人さんが決まりましたが、やっと引き継ぎのスタートについたところです。医療ケアが必要な娘の、将来の住まいについては大きな課題が残ったままです。今後は保佐人さんを中心にした支援者のネットワークで、一緒に考え、支えていく仕組みを模索していくことになります。

一緒に考え、支えていく仕組みを

娘との二人暮らしになってから、将来の生活について漠然とした不安をもちつつも、具体的に何をしたらよいか、気持ちだけ焦っていましたが、2010年に仲間のお母さんたちと、まず取り組んだのが「三人会あんしんノート」を作ることでした。

「あんしんノート」は、親が元気なうちに、本人をサポートしてくれる人たちへの引継書として、とても有効です。私と同じような気持ちでいたたくさんの方から関心をもったとき、「あんしんノート」の活動を通して、新たな繋がりと広がりができました。

東日本大震災の横浜市内の避難所での相談活動がきっかけとなり結成された「よこはま成年後見つばさ」のみなさんとの繋がりに、地域で障害のある人が安心して暮らせる仕組みを考える「真理プロジェクト」がスタートしました。

本人も参加して毎月1回の話し合いを3年間続けるなかで、成年後見制度については繰り返し勉強しました。障害のある人にとっては、時間をかけて本人を理解してもらい、本人の気持ちをじっくり聞き出す身上監護の部分がとても重要で、それは個人でなく法人後見だからこそできることだと思います。

本人は「母さんがいなくなったら、困ることがたくさんある」という思いから、「後見人サ